

NONSENSE

浅田雅明

‘What nonsense!’ cried Lady Windermere. ‘I never heard such nonsense in all my life.’ (p. 32) ¹

「なんてばかな！」とウィンダミア卿夫人は叫んだ。「そんなばかりしい話って生まれてこのかた聞いたこともないわ。」(p. 350)²

短編小説では読者の興味を一気に惹きつけ、無駄のない展開で最後まで飽きさせることなく連れて行かなくてはならない。そのためには緻密に構成されたプロットや簡潔で興味を引く表現が必要で、作者の巧みな話術が要求される。そのなかには風刺、比喩、洒落た皮肉、滑稽、伏線なども含まれ、作者はこうした巧みなテクニックを操る資質を備えていなくてはならない。短編小説『アーサー・サヴィル卿の犯罪』(*Lord Arthur Savile's Crime*)はオスカー・ワイルド(Oscar Wilde)がアフォリズム(aphorism)の名手としてその才能をいかんなく発揮し面目躍如の作品である。この作品は雑誌“The Court and Society Review”に1887年5月11、18、25日に3回にわたって連載されたが、同年の2月から6月にかけて精力的に発表されたそのほかの3作品、すなわち2月に同じく“The Court and Society Review”に掲載された*The Canterville Ghost*、5月25日に“The World”に掲載された*Lady Alroy*(後に*The Sphinx Without a Secret*と改題)、同じく“The World”に6月22日に掲載された*The Model Millionaire*を収録して、1891年7月に*Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories*というタイトルで単行本として刊行された³。

ワイルドの生涯はよく知られておりその詳細についていまさら語る必要はないのだが、この短編小説を出版したころのワイルドを少し辿ってみよう。ダブリンのトリニティ・カレッジを経てオックスフォードのモードリン・カ

レッジに入学し、ペイター (Walter Pater)、ラスキン (John Ruskin) のふたりの教師の影響を受け、その後1875年、77年と2度にわたりイタリア、ギリシアの旅に出かけ、ヘレニズム、カトリシズムに心酔し、その収穫ともいえる、イタリアのラヴェンナを詠った詩 *Ravenna* で Newdigate Prize を獲得し、卒業後ワイルドは意気揚々と1879年秋に大都会ロンドンに進出している⁴。野心家のワイルドが出版のため、自分の名を売り込むためにロンドンの社交界に足を踏み入れたり、「美の使徒」として当時の社会の人々には奇抜、風変りに思えるような唯美的な服に身を包んだりしたのも想像に難くはないのだが、ともあれこうした世間の注目を集める行動で一躍有名となり、1881年12月にはアメリカ講演に向けてワイルドはリバプールを出港しニューヨークへと旅立った。そののち1年間はアメリカ各地を訪れ100回近くの講演を行うのであるが、ヨーロッパで評判の唯美主義者ワイルドという人気は最初華々しかったものの次第に薄れていき、結局のところこのアメリカ講演旅行は成功をおさめたとは言い難く、1882年12月27日ニューヨークをあとにして翌年1月6日にリバプールに帰港している。その後本格的な創作活動を始めようとパリに渡り、ゾラ (Émile Zola)、ユーゴ (Victor Hugo) などの芸術家たちと交流し、当時のパリの華やかで文学的、芸術的な雰囲気になるのだが、豪華な生活に費用を費やしてしまいイギリスに帰国せざるを得ないこととなり、帰国後1884年5月29日にアイルランドの弁護士の娘、コンスタンス (Constance Mary Lloyd) と結婚をしている。翌1885年1月にはロンドンの閑静な住宅街であるシェルシー地区のタイト・ストリート (Tite Street) に居を移し、唯美主義者で当時先端のデザイナーのひとりあるゴドウィン (E.W.Godwin) に新居の改装と装飾を任せている。同年と翌年にはふたりの男の子が生まれるなど、結婚したあとのこの5年くらいは、ワイルドの波乱に満ちた苦悩の晩年と比べれば遥かに穏やかな生活を送った時期であり、創作活動においては、わずか2年余りであるが女性誌 “The Woman’s World” の編集者となり⁵、また夕刊紙 “The Pall Mall Gazette” の書評執筆者として随筆や批評で活躍し、いくつかの出版社にも精力的に原稿を送っている。

こうした時期に “The Court and Society Review” に掲載されたのが『アー

サー・サヴィル卿の犯罪』であるが、1880年代半ばから1890年代初頭のワイルドの小説、評論の多くは最初、定期刊行物に発表されたものである。上述の“The Court and Society Review”のほかに、*Shakespeare and Stage Costume*, *The Decay of Lying*, *The True Function and Value of Criticism* は “The Nineteenth Century”, *Lady Alroy* を “The World” に、*Pen, Pencil and poison*, *The Soul of Man under Socialism* を “The Fortnightly Review”、*The Portrait of Mr. W. H.* を “Blackwood’s Edinburgh Magazine” そして *The Picture of Dorian Gray* が “Lippincott’s Monthly Magazine” に掲載された。このように最初に雑誌に掲載したのは、当時単行本の価格は一般の読者にはかなり高価であったことが理由のひとつに挙げられるが、アメリカ旅行などを通じてワイルドはジャーナリズムの大衆性、そして姿を見せない読者の曖昧性とは裏腹の現実の生活習慣の二面性をおおいに理解し、社会、文化批評のツールとしてのジャーナリズムの役割を理解していたためともいえる。さてこの作品は小気味のいい、ウイットに富んだ、唯美主義に憧れる女性読者をターゲットにした軽快な物語というイメージがあるが、スモール (Ian Small) が指摘するように⁶、ワイルドの作品の中で最もないがしろにされてきた領域の作品でもある。しかしこの短編小説のなかでワイルドはさまざまな試みをしており、それは3年後に発表される代表的傑作で唯一の長編小説である *The Picture of Dorian Gray* のなかほどにはワイルドの芸術観が盛り込まれていないものの、モチーフが殺人という犯罪行為であること、全体に散りばめられたウイットや皮肉、洒落た言い回しなど、そのうち大成功をおさめた戯曲も含め、それらの作品を傑作にする要素がふんだんに盛り込まれており、先駆的役割を果たしている作品といえる。小論ではこうした要素を手掛かりに短編小説『アーサー・サヴィル卿の犯罪』を検証するものである。

冒頭の引用に戻ってみよう。これは物語の最後の場面、訪ねてきたウィンダミア卿夫人 (Lady Windermere) の言葉だが、手相師ポジャーズ (Podgers) に予告された「殺人」という、「運命」が与えた過酷な「義務」を果たしたあと、望み通りに結婚をして子供に囲まれ幸せな生活を送るアーサー・サヴィル卿に対して語られたものである。つまりこの作品は「ナンセンス」

(nonsense) という言葉で終わっているのだが、物語の冒頭をみればそこでも同様に「ナンセンス」に満ちた情景で始まっている。場面はベンティンクス邸 (Bentinck House) でのイースターまえ最後のウィンダミア卿夫人主催の夜会である。夜会に登場する人物の描写に注目してみよう。

Six Cabinet Ministers had come on from the Speaker's Levée in their stars and ribands, all the pretty women wore their smartest dresses, and at the end of the picture-gallery stood the Princess Sophia of Carlsruhe, a heavy Tartar-looking lady, with tiny black eyes and wonderful emeralds, talking bad French at the top of her voice, and laughing immoderately at everything that was said to her. It was certainly a wonderful medley of people. Gorgeous peeresses chatted affably to violent Radicals, popular preachers brushed coat-tails with eminent sceptics, a perfect bevy of bishops kept following a stout prima-donna from room to room, on the staircase stood several Royal Academicians, disguised as artists, and it was said that at one time the supper-room was absolutely crammed with geniuses. (p. 3)

この場面に登場する夜会への参加者たちは、下手なフランス語を大声で話しながら高笑いを放つ公妃、過激な急進派の人物たちと愛想よく話をする貴族夫人たち、無神論者と話し込む説教師がいれば、司教たちは部屋から部屋へと華やかなプリマドンナのあとをくつついて回っている。上流階級主催の夜会は雑多な人間の寄り合いで、人びとの組み合わせも状況もまさに「ナンセンス」に溢れている。このように作品は冒頭から作者ワイルドのヴィクトリア朝上流階級を揶揄する皮肉に満ちた情景で始まっている。

作品のプロットといえば、いたってシンプルである。夜会で出会ったボジャーズに殺人を犯すという運命を告げられたアーサー卿は、それを果たすまではシビルとの結婚はできないと決心し、殺害する相手を選び実行しようとするが二度までも失敗し、シビルとの結婚もあきらめ絶望するが、そのとき偶然見かけたボジャーズを衝動的にテムズ川に投げこみ、見事殺人とい

う、運命が定めた「義務」を果たし、結末にはシビルと幸せな結婚生活を送ることができるというものである。まずこの物語は主人公が殺人を犯すという点で犯罪小説といえるのだが、罪を犯す過程さえもパロディである。探偵小説、犯罪小説といえれば1891年から93年にかけてアーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) がストランド・マガジン (Strand Magazine) にシャーロック・ホームズが活躍する作品を連載して一躍探偵小説のジャンルが盛んになるのだが、1886年から87年にかけてホームズ物の第一作となる『緋色の研究』 (*A Study in Scarlet*) が発表されている。アーサー卿という名前さえもコナン・ドイルのファーストネームのパロディではあるまいが、おそらくワイルドもこの作品は読んでいたであろう。そして名探偵ホームズは発生した難解な犯罪の謎解きを、時には科学的ともいえる手法で解明していき、最後には犯人を特定し問題を解決して、いわば安全な社会を取り戻してくれる。ところがワイルドのこの短編作品ではまず犯罪者がアーサー卿であることが明白にされており、アーサー卿は被害者となる人物を選定し、二度の失敗を重ねたあと、やっと殺人を実行する。このように通常の犯罪小説の手順とは全く逆であり最初から犯人は明らかにされている。また、殺害の手段、過程にしても、毒物と爆弾の入手方法などとても稚拙であり、名探偵ホームズならばベーカー・ストリートの部屋を出て調べるまでもなく直ちに解決できるようなものである。しかしアーサー卿の物語は不条理な殺人が成し遂げられる過程を描いたものであり、かれは殺人を犯すことになんら呵責の念は覚えないし、失敗を重ねながらもギリシア悲劇的な言葉で予言される「運命」「宿命」なるものが自らに課した使命を果たそうとする姿には、なにかしらスティックなところさえ感じられる。

この作品は“The Court and Society Review”に連載されたときには、サブタイトルはワイルドが素人の占い師 Edward Heron Allen に触発されたらしく⁷「手相の研究」 (*A Study of Cheiromancy*) であったが、のちに単行本として発表されたときには「義務の研究」 (*A Study of Duty*) に変更されている。これにはもちろん「義務」が美德として重んじられ、硬直した道徳観念に支配されていたヴィクトリア朝社会に対する風刺がおおいに意図されていたことは明白なのだが、アーサー卿にとっては、課された「義務」は運命

が定めたものであり如何なる苦難があろうとも果たさなくてはならないものである。またその「義務」は社会に対する責務ではなく、愛するシビル・マートン (Sybil Merton) の為に果たされなくてはならない個人的なものであるというのもシニカルである。ところでシビルは、アーサー卿が恐ろしい運命を知らされ、苦悩のあまり夜のロンドンを彷徨し、辿り着いた自宅で目覚めた昼過ぎ、暖炉棚の写真のなかに初めてその姿を現す。ちょうどドリアン・グレイが初めてその姿を肖像画に現すように。

The small, exquisitely-shaped head drooped slightly to one side, as though the thin, reed-like throat could hardly bear the burden of so much beauty; the lips were slightly parted, and seemed made for sweet music; and all the tender purity of girlhood looked out in wonder from the dreaming eyes. With her soft, clinging dress of *crépe-de-chine*, and her large leaf-shaped fan, she looked like one of those delicate little figures men find in the olive-woods near Tanagra, and there was a touch of Greek grace in her pose and attitude. Yet she was not *petite*. She was simply perfectly proportioned — a rare thing in an age when so many women are either life-size or insignificant. (pp. 14-15) (下線部筆者)

シビルは完璧に均整のとれ美しい容姿をした、ギリシア的な優雅さを湛えた存在で、アーサー卿にとってシビルの存在は「善良にして高貴なるすべてのものの象徴」(a symbol of all that is good and noble, p. 15) であり、さながら偶像崇拜の対象となる女神のような存在でもある。そのシビル得るため、すなわち結婚するためには、アーサー卿は「義務」を果たさなくてはならないと決心する。その献身的な行為はまるで中世の騎士の苦難かつ試練の旅を連想させるようなものでもある。シビルを愛するがゆえにアーサー卿はポジャーズに予言された殺人を犯さなくてはならない。そして「自分の義務がどこにあるかをはっきり自覚しており、殺人を遂行してしまうまで結婚する権利はないのだと事実を十分知っていたのである。」(he recognized none the less clearly where his duty lay, and was fully conscious of the fact that he

had no right to marry until he had committed the murder. p. 15) 彼の愛には単なる情熱以上のものがあり、殺人という行為に当然の嫌悪を覚えはするのだが、「それは罪でない、犠牲なのだとかれの心情が告げたし、それよりほか道は開けていないのだとかれの理性が教えたのである。」(His heart told him that it was not a sin, but a sacrifice; his reason reminded him that there was no other course open. p. 15) 自分のために生きるか他人のために生きるかのどちらかを選ばなければならぬと考え、アーサー卿は「自分の義務を果たすことになんのためらいも感じなかったのである。」(he felt no hesitation about doing his duty. p. 15) それどころか「自分の担っている使命は重大な厳肅性を有する者である」(the mission in which he was engaged being one of great and grave solemnity. p. 16) と考えている。こうした行為はアーサー卿のような地位の多くの男たちには実行できないことであるのだが、「アーサー卿はこの時代のあらゆるものなかで最も稀なもの、すなわち常識を備えている」(He had that rarest of all things, common sense. p. 16) と、ワイルドは皮肉たっぷりに讃えている。課された義務を果たそうとするアーサー卿の決意が示唆するものは、表面的にはチューダー朝以来のピューリタニズムで理論武装し義務と労働の美德を声高らかに説いているが、実は功利的でスノビッシュな人々が横行するヴィクトリア朝社会への鋭い批判であり、文明批判でもある。

偶像的崇拜の対象であるシビルは崇高で神的な存在でありこの世のものとは思えない。それはアーサー卿にとってはさながら「神」「聖杯」のような存在でもあって、このように考えるとアーサー卿の義務の遂行は一種の宗教的な行為であり、それはアーサー王の円卓の騎士の聖杯探求の試練の旅を思い起こさせてくれる。騎士たちは求めるものを得るためには命を懸けて課された「義務」を果たさなくてはならない。そのなかでも「聖杯」を獲得し正視できるのは、ギィネヴィア王妃への愛という世俗の罪をひきずるため純粹とはいえない騎士ランスロットではなく、その息子ガラハッドのように独身で純潔無垢の騎士でなくてはならない。円卓の騎士は「義務」を遂行するためには敵対するものを殺害しても容認される。それはすべて「義務」の遂行のために咎められることはない。しかし「聖杯探求」は神を畏敬し神のため

に戦う、天上の精神的な騎士道であるので、携わる騎士は純潔無垢であって、殺人を犯してはならない。ところがアーサー卿は独身で純潔無垢ではあるけれど、シビル＝聖杯を得るために殺人を犯し、それを獲得したあとは騎士ガラハッドのように神の国に召されるのではなく、俗世で幸せに生きている。アイルランド出身のワイルドがケルト伝説やアーサー王伝説を熟知していたことは容易に想像できるが、アーサー卿の「義務」の遂行の旅もまたこの伝説のパロディとして描かれている。さらに、手相師ポジャーズは人の過去を暴き未来を予見し運命を語ることができるという意味において、人間でありながら神のような役割を担っているともいえる。しかしワイルドの描写によればポジャーズは「神秘的でも、秘教的でも、ロマンティックふうでもなく、小柄でがっしりした体格で、禿げ頭で、大きな金縁めがねをかけていて、町医者と田舎弁護士をつき交ぜたような感じ」(he is not mysterious, or esoteric, or romantic-looking. He is a little, stout man, with a funny, bald head, and great gold-rimmed spectacles; something between a family doctor and a country attorney. p. 5) の人物でありその外見と内実のミスマッチ⁸がシニカルに描かれている。そして殺人という義務の遂行を二度までも失敗し、結婚は破談にしようとし意のどん底にいるアーサー卿が「自分の宿命は運命の女神のなすがままにまかせよう」(Let Destiny work out his doom. p. 29) と義務の遂行をあきらめかけた途端、「運命」はアーサー卿の眼前にテムズ川の欄干にもたれかかるポジャーズを登場させる。真夜中過ぎにポジャーズがただひとりでテムズ川にいた理由は明確にされていないが、いずれにせよ衝動的に、神をかたるポジャーズの両脚をかかえてテムズ川に放り込み殺害することによって、やっとアーサー卿が義務を果たすことができるというのもワイルドらしい筋書といえるし、そこにはギリシア旅行が契機になってヘレニズムに傾倒していき、神に対してもなにものに対しても服従しないという、のちのワイルドの新しいヘレニズム主義というべき姿勢の一端が垣間見える。そして殺人を予言されたアーサー卿が予言を行った手相師ポジャーズ本人を殺害するというのもまたパラドックス的な殺人である。

アーサー卿もドリアン・グレイもロンドンの夜を彷徨するが、それはとも

に物語の展開に重要な転機となっている。ドリアンが目撃するコベントガーデンは埃にまみれた騒々しい実際の市場とは程遠く、ワイルドの手に委ねられると鮮やかな色彩に溢れる場所として感覚的に描かれているが、これを境にドリアンは邪悪な生活に陥っていく。一方でアーサー卿が彷徨するふたつのロンドンの夜もまた彼にとって重要な転機となるのだが、このふたつの夜は対照的な描かれ方をしている。ボジャーズから聞き出した自らの運命に気も動転し、ベンティンクス邸を飛び出したアーサー卿は陰気な森に心惹かれるように夜のハイド・パークへ向かい、そのあとオクスフォード通りを横切って狭い路地に入り込む。そこで見たものは貧困と老に打ちひしがれた悲惨な人々の姿である。

And yet it was not the mystery, but the comedy of suffering that struck him; its absolute uselessness, its grotesque want of meaning. How incoherent everything seemed! How lacking in all harmony! He was amazed at the discord between the shallow optimism of the day, and the real facts of existence. He was still very young. (p. 12) (下線部筆者)

何ひとつ不自由のない満たされた生活を送ってきたアーサー卿は、この場面で初めて人生の悲惨さ、現実を認識することになる。アーサー卿が見た夜のロンドンの世界は、いままで彼が過ごしてきた豊かな世界とは全く異なる別の世界であり、その世界は汚れて貧困に喘いでいる。アーサー卿はここで初めてふたつの世界を認識し、その不調和・不一致に、その現実に啞然とするのである。しかしアーサー卿が初めて経験する苦悩を描きながら、一方で夜明けの薄明りのなかコベントガーデンに向かう荷車に積まれた野菜の描写は「そしてうず高く積みあげた野菜が朝空に映えて翡翠のかたまりのように、みごとな薔薇のピンク色の花弁を背にした緑の翡翠のかたまりのように見えた」(and the great piles of vegetables looked like masses of jade against the morning sky, like masses of green jade against the pink petals of some marvelous rose. p. 13) と、色彩鮮やかに描かれている。ロンドンの夜の暗闇と明け方の鮮やかな色彩のコントラストは見事であるが、それはドリアン

がロンドンの夜を彷徨する場面でも踏襲されている。そして路地から聞こえてくる罵声や悲鳴、嘲笑に溢れた暗黒の夜の闇から、色彩鮮やかな夜明けのロンドンへの移行は、アーサー卿の意識の変化と同調する。しかし現実の世界に目覚めたアーサー卿にとって、殺人を犯すという実際的な企ては二度とも成功することはない。

ではもうひとつの夜を見てみよう。殺人が二度とも失敗に終わり、失意のアーサー卿は倶楽部を出てあてもなくテムズ川のほうに向かい、川岸に腰をおろして何時間も過ごす。時間は夜中の二時ごろである。ふと目を上げると、そこにひろがっているのは、運命を知らされ驚愕のあまり彷徨した、あのロンドンの夜とは全く異なる幻想的な美しい夜である。

The moon peered through a mane of tawny clouds, as if it were lion's eye, and innumerable stars spangled the hollow vault, like gold dust powdered on a purple dome. Now and then a barge swung out into the turbid stream, and floated away with the tide, and the railway signals changed from green to scarlet as the trains ran shrieking across the bridge. After some time, twelve o'clock boomed from the tall tower at Westminster, and at each stroke of the sonorous bell the night seemed tremble. Then the railway lights went out, one solitary lamp left gleaming like a large ruby on a giant mast, and the roar of the city became fainter....How unreal everything looked! How like a strange dream! The houses on the other side of the river seemed built out of darkness. One Would have said that silver and shadow had fashioned the world anew. (p. 29)

黄褐色の雲間から夜空に月が浮かび、紫の円蓋に金箔をまき散らしたように無数の星がきらめいている。川には小舟が漕ぎ出していき、ゆらゆらと漂いながら消えていく。そのうえの鉄橋を列車が汽笛を鳴らして通り過ぎると緑から赤へと信号が変わる。やがて真夜中を告げる寺院の鐘の音が身震いするように夜に鳴り響く。これを合図にするかのように線路の明かりも消えてい

き、ひとつ残った灯りがルビーのようにきらめき、都会の騒音も微かになっていく。そして対岸の家々は暗闇のなかに銀色と影の幻想的な世界となって現れてくる。この場面でもワイルドの彩り豊かな描き方は素晴らしく、鮮やかな色彩が浮かぶ夜の描写はやがて幻想的な銀色の闇へと移行していくのだが、これは同時にアーサー卿が現実の世界から幻想の世界へと移行していく様をも示している。そして現実から遊離した幻想的な状況に於いてやっと彼は「義務」を果たすことが可能となるのである。ワイルドは素面よりも仮面こそ心理を語るとかたり、想像力によって真理を創造させると考えていた。事実を事実として物語るリアリズムをワイルドは否定して、「芸術が人生を模倣する以上に人生が芸術を模倣する」(*The Decay of Lying*. p. 924) と主張し、想像、幻想の世界に入りこみ、そこに芸術家としてのイメージを構築しようとした。『ドリアン・ 그레이の肖像画』において画家バジル・ホールワードはドリアンに「絵画は芸術があるべき姿、つまり、無意識で、理想的で、遠く離れたもの」(it had all been what art should be, unconscious, ideal, and remote p. 110) と語っているが、ワイルドにとって求める芸術は「遠く離れたもの」であって、現実の存在ではない。芸術において事実を語ることは極めて陳腐なことであり、真の芸術とは「人生を素材の一部として取り上げてそれを造り直し、新しい形式に改造し、事実には全く無関心で、創案し、想像し、そうして自分自身と現実のあいだに、新しいスタイル、装飾的理想的な処理という貫くこともできない障壁をおく」(*The Decay of Lying*) ものであり、それを達成するものは事実 (real/fact) ではなく「嘘」(false/fiction)、すなわち想像力にほかならない。こうした芸術観はこののちの小説、評論においてさらに明確に表現されることになるのだが、人生の現実を直視し義務の遂行を果たそうとして挫折したアーサー卿が、幻想的な虚構とも思える夜の闇のなかに入り込んだとき、まさにそのときに義務の遂行を果たすことができるという展開は、現実よりも想像力に価値を認めるワイルドの芸術観の一端を示している。

ワイルドはまた、ギリシアのヒポクラテスから始まってエラスムス、パスカル、ゲーテ、ショーペンハウアーらに引き継がれたひとつの文学ジャンル

であるアフォリズム（箴言）の名手でもある。成功をおさめた長編小説 *The Picture of Dorian Gray* や *An Ideal Husband*, *A Woman of No Importance*, *The Importance of Being Earnest* などの風習喜劇や評論を含め、ウィット、皮肉、ユーモアあふれるワイルドの言葉はシェークスピアに次いで引用される頻度が高い。シェークスピアとの関係についていえばワイルドはシェークスピアの「ソネット集」に大いに感銘を受けているし、文筆活動にはいったとき理想的芸術家としてのシェークスピアが念頭にあった。この作品においても随所にシェークスピアの人物との比較が語られている。「幸運なことにはかれは単なる夢想家でもなければ、怠惰なディレッタントでもなかった。もしそうだったら、ためらっていたであろう、ハムレットみたいに、そして不決断のため目的を達しえなかったであろう」(Fortunately also, for him, he was no mere dreamer, or idle dilettante. Had he been so, he would have hesitated, like Hamlet, and let irresolution mar his purpose. pp. 15-16) と、恐ろしい運命を予告されたアーサー卿は不決断のために目的を達しえなかったハムレットと比較して、義務の遂行を果たそうとする行為の人として描かれているのもその一例である。さて、手相師に予告された運命、義務を遂行するという単純なプロットであるが作品の最後まで軽快に読み進めていけるもうひとつの要素がアフォリズムでもある。第1章から最後の第6章までワイルドは惜しげもなくアフォリズムとウィットに富んだ表現を散りばめているが、ここでそのいくつかを引用してみよう。三度の離婚歴のあるペイズリー侯爵夫人については、「しかし愛人をかえたことは一度もなかったので、世間ではとうの昔に夫人にまつわる醜聞を口にしなくなっていた」(but as she had never changed her lover, the world had long ago ceased to talk scandal about her. p. 3) と語り、結婚については、「結婚というものは相互の誤解の上に成り立つものですから」(The proper basis for marriage is a mutual misunderstanding. p. 7)、さらにそのほかの表現では、「ほんという、わたし医者は大嫌いだけど、お薬は大好きなの」(The fact is that, though I hate doctors, I love medicines. p. 19)、「ひどく退屈な連中とお食事なの、なにしろスキャンダルなど口にしないんだから」(I am dining with some very dull people, who won't talk scandal, p. 19)、「クレメンティーナ夫人が甘いも

のがお好きだなんてちっとも知らなかったわ。もっと知的なかただと思っていたのに。」(I had no notion that Lady Clementina liked sweets. I thought she was far too intellectual. p. 22) などが続く。この最後の無邪気なシビルの言葉はアーサー卿に、殺人のターゲットであったクレメンティーナ夫人は彼がお菓子に仕込んだ毒薬で亡くなったのではないと気づかせ、顔面蒼白にさせる場面が続くので、さらに劇的効果を大きくさせるものである。そして二度目の殺人の手段を爆弾時計に決めたアーサー卿がテロリストに爆弾の作製を頼む場面では、「イギリスの刑事さんは実はわたしどもの親友でしてね、かねがね気づいておるのですが連中の間抜けさのおかげで、こちらの思いどおりに仕事ができます。」(The English detectives are really our best friends, and I have always found that by relying on their stupidity, we can do exactly what we like. p. 25) というアイロニー。爆弾時計は「自由の女神が独裁君主制の邪神を踏みつけている」(an ormolu figure of Liberty trampling on the hydra of Despotism, p. 25) もので、実際に爆発した時には、もちろん殺傷威力のあるものではないのだが、「自由の女神がころげ落ちて、炉格子にぶつかって鼻を折っちまった」(the goddess of Liberty fell off, and broke her nose on the fender, p. 27) となり、「パパのおっしゃるにはこれは自由は永続せず、必ず没落することを教えているのだから、大いにためになるんですって。パパのお話だと自由はフランス革命のときに発明されたとか。なんとおっかないことでしょう！」(Papa says they should do a great deal of good, as they show that Liberty can't last, but must fall down. Papa says Liberty was invented at the time of the French Revolution. How awful it seems! p. 28) と続いている。そして義務を遂行したアーサー卿は晴れてシビルと結婚するのだが、「二人にとってロマンスが現実によって殺されることはなかった」(For them romance was not killed by reality. p. 31) と語られ、最後のウィンダミア卿夫人の、「そんなばからしい話って生まれてこのかた聞いたこともないわ」(I never heard such nonsense in all my life. p. 32) という言葉で物語が閉じられている。これらの引用はほんの一部であるが、いずれもウィットや皮肉に富んだ洒落た表現で、物語を軽快に展開する要素として機能しているのだが、これらのアフォリズムはこのあとすぐ

に世紀末の人々に大喝采で称えられることとなる風習喜劇へと引き継がれていくのである。

ヴィクトリア朝といえば産業革命ののち急激に社会が変革した時代で、いわずと知れた大英帝国が世界に冠した時代である。人々はイギリス人であることにプライドを持つとともに、その義務を果たすという課題が課された時代である。しかしそれはまたダーウィンの説をはじめとする新しい考え方の台頭により、堅固に維持してきたピューリタニズムに混迷をきたし、伝統が新しい価値観に揺れ動いた時代であった。この作品にみられるように、愛するただひとりのひと、シビルと結婚をするという、個人的な理由のための殺人を崇高な義務の遂行にすり替え、殺人を正当化し、幸せなエンディングを迎えるという展開は社会通念的にはまさに「ナンセンス」なのだが、こうした「ナンセンス」のなかに混迷した価値観の世紀末を駆け抜けた唯美主義者ワイルドの真理が存在するといえるのであろう。そして作品のなかの適所に配置されたアフォリズムはヴィクトリア朝後期の硬直した大英帝国のスノッブな風潮をシニカルに批判したものが多く、ワイルドの文明批判、文化批評といえるものである。この作品を執筆した頃のワイルドは上述したとおり、編集者をしながら精力的に文筆活動をした時期である。本格的な文化、芸術、社会批評はこのあとの作品で顕著になるため、この短編小説は比較的軽快でパロディ短編小説という評価をされがちである。しかしながら、作品のなかでは様々な試みがなされており、ワイルドが「芸術が人生を模倣する以上に人生が芸術を模倣する」というパラドックスな生き方で自分の人生を芸術化し、美の殉教者として世紀末の寵児となって活躍する才能がすでに多く散りばめられている作品である。

注：

1. Wilde, Oscar. *The Complete Short Stories*, Oxford World's Classics (Oxford University Press, 2010), p.32. なお本文中の引用はこの版による。
2. オスカー・ワイルド全集Ⅰ 西村孝次訳（青土社、1980）なお本文中の和文引用はこれを参照したものである。

3. *Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories*, (Osgood McIlvaine, 1891).
4. Porter, Roy. *London: A Social History* (London: Penguin Books, 2000), p.341. によればワイルドはオクスフォードという地方の町から大都会に進出した時、「みんなが電車に乗ろうと焦っているように見える」と都会のテンポの速さに驚きを示している。
5. Spirit, Jane. ed., *Oscar Wilde, Lives of Victorian Literary Figures IV* (London: Pickering, 2006) Vol.1, p.126で女性誌の編集長というポストはワイルドの自由奔放な経歴のなかでも珍しいが、週二回定期的に編集室にやってきたと語られている。
6. Small, Ian. *Oscar Wilde: Recent Research* (Greensboro, 2000) p.117.
7. Moyle, Franny. *Constance: The Tragic and Scandalous Life of Mrs Oscar Wilde* (John Murray, 2012) p.130.
8. Ruth Robbins, *Oscar Wilde* (London: Continuum, 2011), p.93.

参考文献：

- Amor, Anne Clark. *Mrs Oscar Wilde: A Woman of Some Importance* (London: Sidgwick & Jackson, 1983).
- Bloom, Harold, ed. *Oscar Wilde: Bloom's Classic Critical Views* (New York: Infobase Publishing, 2008).
- Callow, Simon. *Oscar Wilde and His Circle* (London: National Portrait Gallery Publications, 2000).
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde* (London: Penguin, 1988).
- Hart-Davis, Rupert, *Selected Letter of Oscar Wilde* (Oxford University Press, 1979).
- Knox, Melissa. *Oscar Wilde in the 1890s: The Critic as Creator* (New York: Camden House, 2001).
- McKenna, Neil. *The Secret Life of Oscar Wilde* (London: Century, 2003).
- Negrl, Paul. *Oscar Wilde's Wit and Wisdom* (Dover Publications, Inc., 1998).
- Sloan, John. *Oscar Wilde* (Oxford World Classics, 2009).
- Small, Ian. *Oscar Wilde Revalued: An Essay on New Materials and Methods of Research* (Greensboro: ELT Press, 1993).
- Varty, Anne. *A Preface to Oscar Wilde* (London: Longman, 1998).
- Worth, Katharine. *Oscar Wilde* (London: Macmillan, 1983).

